ISSN 0385-9487

東洋學論叢

禪宗の登場と社會的反響
—『淨土惡悪集』に見る北宗禪の活動とその反響—　伊吹　敦（1）

中世北インドのバクティ思想と
女性詩人ミーラーン・バーイー　橋本　泰元（81）

Saṅgītanārāyaṇa 所説の觀想図像　清水　乞（137）

第四格の意味と用法
—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（6）—　菅沼　晃（170）

東洋大学文学部紀要第53集

印度哲学科篇

XXV

研究室報告

① 本年度の本学役職としては、清水乞教授が新たに教務部長に就任したほか、田村晃祐教授が引き続き大学院委員長、ならびに評議員・理事を担当した。

② 本年度も学科として新入生歓迎行事を充実させることに意を注いだ。特に、ゼミ連絡会議の発案のもと、平成十一年四月十一日に「フレッシュマンキャンプ・イン・ワンデイ」と銘打って行われた新入生歓迎球技大会・カルタ大会では最高の盛り上がりを見せ、多くの参加者を得て、新入生同士、あるいは新入生と上級生の交流を促すという点で、大いに効果をあげることができた。

③ 本年度も「ゼミ活性化対策」として三氏をお招きして講演会を開催した。先ず、平成十一年七月二日には庭野平和財団助成担当の高谷忠園氏による「アジア諸国に展開するNGO活動」と題する講演が、また、同月十五日にはインド国立ネルー大学助教授、サッチダーナンド・スィンハー博士による「日常生活におけるヒンドゥー教」と題する講演が行われた。いずれも実体験に裏づけされた内容で非常に好評であった。また、十二月九日には、「韓国宗教思想の変遷と現状」という題目で東京大学東洋文化研究所講師、金漢益博士に講演をして頂いた。これまでゼミ活性化対策による講演がインド中心であったこともあって、多くの学生に新鮮な印象を与えたようであった。

④ 本年度から、印度学仏教学に関する「デジタル画像データ蓄積事業」を開始した。これは各教員の専門に関係する画像を様々なメディアからデジタル情報として収集しようとするもので、将来、授業などにおける活用が期待される。

⑤ 伊吹敦専任講師が平成十一年四月一日付をもって助教授に昇任した。また、同助教授は平成十一年九月九日、龍谷大学における日本印度学仏教学会第五十回学術大会において学会賞を受賞した。

⑥ 春原高信君の退任に伴ない、平成十一年五月一日付で堀内綾子さんが事務助手に就任した。また、二年間にわたって事務助手を努めてくれた笠井文雄君が、大学院進学のため、平成十二年三月三十一日付で退職した。

⑦ 本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタントは、大学院後期課程の松田敦之君と渡邊純子さんが担当した。

⑧ 本年度の卒業論文・卒業制作の提出者は、Ⅰ部が五十三名、Ⅱ部が三十六名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は、以下の通りである。田村芳朗奨学基金受賞者―佐々木暁史（Ⅰ部）、桑野麻美（Ⅰ部）。勧学奨学基金受賞者―笹沼志津可（Ⅰ部）、板垣正寿（Ⅱ部）。校友会学生研究奨励基金受賞者―今野道隆（Ⅰ部）、池沢雅江（Ⅱ部）、高橋むつき（大学院）

平成十一年度業績（平成十一年一月～十二月）

菅沼　晃

〈著書〉

『維摩経をよむ』（NHKライブラリー102、単著、NHK出版、平成十一年六月二日、ライブラリー判、二八五頁）

『ブッダの悟り33の物語』（単著、法蔵館、平成十一年十二月十日、B5判、二五三頁）

〈論文〉

「第三格の意味と用法—Siddhāntakaumudī Kārakaprakaraṇa 訳註（5）」（単著、「東洋学論叢」第二四号〈「東洋大学文学部紀要」第五二集（印度哲学科篇）〉、平成十一年三月三十日、A5判、一三七～一六〇頁）

「『共生』の現代的意義と仏教における『共生』の原理」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、三～一三頁）

「ヒンドゥー教のブッダ観」（単著、「大法輪」（大法輪閣）四月号、平成十一年四月一日、A5判、一一六～一二〇頁）

「共生の原理としての非暴力（不殺生）」（単著、「日本仏教学会年報」第六四号、平成十一年五月二十五日、A5判、一五～二九頁）

「共生の原理としての仏教—特に非暴力の可能性について考える」（単著、「中央学術研究所紀要」第二八号、平成十一年十二月一日、A5判、四八～六八頁）

〈その他〉

「仏典のことば14」（単著、「宝積」（宝積比較宗教・文化研究所）一月号、平成十一年一月一日、A5判、一八～二〇頁）

「仏典のことば15」（単著、「宝積」（宝積比較宗教・文化研究所）七月号、平成十一年七月一日、A5判、一九～二一頁）

「梵天」「帝釈天」「四天王」「地天」の項（単著、『仏教の神々小百科』、大法輪閣、平成十一年六月一日、A5判、九三～一〇一頁）

仏教史関係六項目（単著、『Q&A〈仏教入門〉』、大法輪閣、平成十一年八月一日、A5判）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会評議員／日本仏教学会／禅学研究会／日本近代仏教史研究会

学界における研究発表

「モンゴル仏教の現状」（東洋学研究所例会、平成十一年十二月十一日、東洋大学）

〈調査活動〉

「仏教の生命倫理」（平成十一年度科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者：国際仏教大学院大学、今西順吉〉）

「インド・マハーラーシュトラ州における石窟寺院の調査」（海外研究費による調査、平成十一年七月十八日～二十九日、インドのマハーラーシュトラ州にて、カルリ、バージャー、ナーシク等の石窟寺院を調査）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：インド宗教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

インド古典講読①（朝霞、Ⅰ部）

インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部④、Ⅱ部②〉）

大学院：印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（前期）

印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（後期）

市民大学等

日曜講義「インドの哲学と宗教入門」（平成十一年一月～十二月、十回、東洋大学）

その他

インド思想研究会顧問：月一回の研究会にて Rāmāyaṇa 第一篇第十章を講読／八月六～八日、山中湖セミナーハウスにて夏期合宿

〈社会活動〉

庭野平和財団評議員／大法輪石原育英会理事／宝積比較宗教・文化研究所顧問

講演「ブッダの悟りとヨーガ」（日本ヨーガ光麗会全国大会、平成十一年十月十六日、京都）

田村晃祐

〈著書〉

『悟りを求める心』（単著、多聞堂、平成十一年九月二十五日、A5判、三七頁）

『宮本正尊博士の世界』（共著、中山書房、平成十一年六月二七日、A4判、九二四頁）

〈論文〉

「明治の仏教界（河口・能海をめぐる明治の社会と宗教）」（単著、「東洋大学　アジア・アフリカ文化研究所研究年報」第三三号、平成十一年三月三十一日、B5判、一五一～一五四頁）

「最澄の『守護国界章』下巻の一乗論争 ―法宝の一乗思想をめぐって」（単著、「東洋の思想と宗教」第十六号、平成十一年三月二十五日、A5判、一〇一～一二三頁）

「一乗思想と共生」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、九七～一〇四頁）

「仏のこころ」（単著、「東洋大学交友会報」第二〇〇号、平成十一年七月三十一日、B5判、四～七頁）

「日本仏教の流れ」(1)(2)(3)(4)（単著、雑誌「在家仏教」、平成

十一年九月・十月・十一月・十二月、B5判、総計二四頁）

〈その他〉

「先学を語る―結城令聞博士」（共著、「東方学」九七輯、平成十一年一月二十九日、A5判、一三五～一五七頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本仏教学会理事／仏教思想学会理事／早稲田大学東洋哲学会理事／日本印度学仏教学会評議員／日本宗教学会評議員

〈調査活動〉

「空也・空海の遺跡」（平成十年度文部省科学研究費による研究、研究分担者、平成十一年二月二十七日～三月二日、高知・徳島・兵庫県）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：日本仏教史（白山、Ⅱ部）

仏教学演習（白山、乗入れ（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③））

大学院：仏教学特論Ⅲ（前期）

仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（前期）

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ（後期）

学外担当科目

東洋哲学演習Ⅰ（早稲田大学大学院）／東洋哲学研究指導Ⅰ（同）／日本思想史特殊研究（二松学舎大学大学院、集中講義）

〈社会活動〉

TV放送「仏教を生きる⑩⑪⑫」（NHK　こころの時代」、平成十一年一月・二月・三月、NHK第三チャンネル）

講演「悟りを求める心」（平成十一年三月二十七日、多聞塾）

講演「さとりへの大直道」（平成十一年四月十三日、日本工業クラブ）

講演「仏のこころ」（東洋大学交友会交友大会、平成十一年五月十五日、東洋大学スカイホール）

講演「人生を見る眼」（在家仏教協会、平成十一年十月九日、大手町ビル）

講演「無常を超える」（武蔵野女子大学日曜講演、平成十一年十一月二十一日、武蔵野女子大学）

講演「最澄と徳一」（天台宗埼玉教区布教師会、平成十一年十一月六日、川越喜多院）

〈大学・学部の管理・運営〉

大学院委員長／学校法人東洋大学理事／学校法人東洋大学評議員／円了センター運営委員／東洋学研究所所員／教学改革プロジェクト委員／国際交流センター委員／円了研究運営委員／交友会奨励賞・奨学金運営委員

清水　乞

〈論文〉

「Rāgavibodha の観想図像とラーガの継承」（単著、「東洋学論叢」第二四号〈「東洋大学文学部紀要」第五二集（印度哲学科篇）〉、平成十一年三月三十日、A5判、九三～一三六頁）

「インド芸術にみられる『共生』の原理」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、一五～二一頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会評議員／密教図像学会評議員／日本仏教学会

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部③、Ⅱ部①〉）

大学院：仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ（前期）

印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ（後期）

〈大学・学部の管理・運営〉

教務部長

森　章司

〈論文〉

「『律蔵』における罪と懺悔―原始仏教における 'apattiprati-desanā'」（単著、「大倉山論集」第四三輯、平成十一年三月三十一日、A5判、三七～九八頁）

「人とものの共生」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、一一三～一二八頁）

「『原始聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」（単著、「中央学術研究所紀要モノグラフ篇」第一号、平成十一年七月十日、A4判、一～八三頁）

「原始仏教時代の暦法について」（単著、「中央学術研究所紀要モノグラフ篇」第一号、平成十一年七月十日、A4判、八四～一〇二頁）

「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」（単著、「中央学術研究所紀要モノグラフ篇」第一号、平成十一年七月十日、A4判、一〇三～一四七頁）

〈その他〉

「仏教と科学―アビダルマの世界」（単著、「月例講話集」（大倉精神文化研究所）第十八集、平成十一年三月二十日、新書判、三一～五〇頁）

「人の命・もののいのち」（単著、「大倉山講演集」（大倉精神文化研究所）第七集、平成十一年三月二十五日、A5判、一一五～一二八頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／地域文化学会理事／日本宗教学会／日本仏教学会／比較思想学会／仏教思想学会

学会における研究発表

「『律蔵』における出家諸規定の形成過程」（日本印度学仏教学会第五十回学術大会、平成十一年九月九日、龍谷大学）

「経蔵の『法』『非法』と律蔵の『法』『非法』」（日本仏教学会、平成十一年度学術大会、平成十一年十月十六日、駒沢女子大学）

〈調査活動〉

「原始仏教聖典資料における遊行に関する諸記事の実地検証調査」（中央学術研究所委託研究、研究代表者、平成十一年十一月十日～十二月四日、Campāpura 等の原始仏教聖典に記載される各地にて遊行に関する諸事項を調査）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：仏教学概論（朝霞Ⅰ部／白山Ⅱ部）

アビダルマ哲学（白山Ⅰ部）

仏教学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部③、Ⅱ部①〉）

大学院：仏教学演習Ⅳ・仏教学研究指導Ⅰ（前期）

仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅱ（後期）

川崎恒定

〈論文〉

「仏教における心の教育」（単著、尾田幸雄・尾田綾子編『生涯学習社会における心の教育』〈『心の教育実践講座（全十巻）』第五巻、日本図書センター、平成十一年九月十五日〉、B5判、一四八～一五七頁）

「仏教における智慧について」（単著、大正大学オープンカレッジ夏期公開講座（緑陰講座第4回）（平成十一年十二月三十一日、A4判、一一～二三頁）

〈その他〉

「文学部・人文学部で人間を考える」（インタヴュー記事「私大蛍雪」第四二号、平成十一年四月三十日、A4判、六～七頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本西蔵学会委員／財団法人東方学会評議員／仏教思想学会理事／日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会理事／比較思想学会評議員／日本倫理学会／日本思想史学会／人体科学会／国際仏教学会

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：宗教学概論（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅱ（白山、乗入れ）

チベット文献講読（白山、乗入れ）
仏教学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部⑥、Ⅱ部④〉）
大学院：仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（前期）
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（後期）

〈社会活動〉

団法人東洋文庫「東洋学報」編集委員／財団法人東方研究会評議員／財団法人国際仏教交流センター評議員

講演「チベットの仏教と文化」（財団法人東方研究会・東方学院公開講義、平成十一年五月三十一日、東京都千代田区外神田）

講演「仏教の知恵を現代社会に活かすには」（いわき市勝行院暁天講座、平成十一年七月二十九日、福島県いわき市三函勝行院）

講演「仏教の知恵と現代」（真言宗智山派総本山智積院「暁天講座」、平成十一年八月一日、京都市下京区智積院）

講演「釈尊の教え」（東洋大学哲学堂祭記念講演、平成十一年十一月六日、中野区哲学堂）

〈大学・学部の管理・運営〉

東洋学研究所運営委員／印度哲学科第Ⅱ部主任

橋本泰元

〈著書〉

『ぼくの庭にマンゴーは実るか』（監訳、段々社、平成十一年五月一日、A5判、全三二四頁）

〈論文〉

「中世ヒンドゥー教における『共生』の原理」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、二三～五四頁）

「中世北インド民衆思想とカビール」（単著、「東洋学論叢」第二四号〈「東洋大学文学部紀要」第五二集〉、平成十一年三月三十日、A5判、六九～一〇五頁）

〈その他〉

「クシティ・モーハン・セーン『ヒンドゥー教』解説」（単著、平成十一年九月二十日、講談社現代新書、一九七～二二五頁）

"Researches on Early Literature in New Indo-Aryan Languages in Japan after 1980" (単著, in Offredi, Mariola (ed.) *The Banyan Tree—Essays on Early Literature in New Indo-Aryan Languages*, Manohar: New Delhi, 1999, A5判、五六七～五七〇頁)

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会／日本南アジア学会／日本宗教学会／日本仏教学会

学会における研究発表

「クリシュナ・バクティにおける男性性—ミーラーン・バー

イーの場合」（日本南アジア学会第十二回学術大会、平成十一年十月三日、東北大学）

〈調査活動〉

「インド・ネパールにおけるヒンドゥー教と仏教の習合状況の調査」海外研究費による調査、平成十一年八月十九日～九月三日、インドのウッタル・プラデーシュ州及びネパールのカートゥマンドゥーにおいて仏跡やヒンドゥー教寺院を調査）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部：ヒンドゥー教概説（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

インド哲学演習②（朝霞、Ⅰ部）

インド哲学演習（白山、乗入れ（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③））

ヒンディー文献講読（白山、Ⅱ部）

学外担当科目

ヒンディー語（インド言語文化研究）Ⅰ・Ⅱ（大正大学）／ヒンディー語Ⅲ・Ⅳ（同）／人間探求C3－c（課題レポートC）（同）

〈社会活動〉

講師：シルクロード文化研究所（平成十一年十二月三十一日迄）

〈大学・学部の管理・運営〉

文学部自己点検・自己評価委員／東洋学研究所研究所員

渡辺章悟

〈著書〉

『中央アジア出土の仏教梵語文献の研究』（単著、平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書、平成十一年三月、A4判、一～五九頁）

〈論文〉

「古代インドの倫理思想」「仏教の成立と展開」（単著、新保哲篇著『東洋倫理思想史概説』、平成十一年五月七日、北樹出版、二九～六六頁）

「『金剛般若』の重層性―ギルギット写本と現存 Conze 校訂本との比較」（単著、阿部慈園編著『金剛般若経の思想的研究』、平成十一年十月二十九日、春秋社、五九～九一頁）

「金剛般若の法滅句」（単著、「印度学仏教学研究」第四八巻第一号、平成十一年十二月二十日、A5判、四六一～四六九頁）

〈その他〉

書評「羽矢辰夫著『ゴータマ・ブッダ』春秋社」（単著、「月刊　寺門興隆」（興山社）十一月号、平成十一年十一月一日、一〇一～一〇三頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会／日本佛教学会／日本宗教学会／仏教思想学会／日本西蔵学会／国際仏教学会（IABS）

学会における研究発表
「インドの法滅思想について」（東洋学研究所例会、平成十一年六月十九日、東洋大学）
「金剛般若経の法滅句」（日本印度学仏教学会第五十回学術大会、平成十一年九月十日、龍谷大学）
〈調査活動〉
XIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies（海外研究費による研究、学会参加、平成十一年八月二十四日～二十八日、スイス・ローザンヌ大学）
〈教育活動〉
学内担当科目
学　部：インド哲学演習①（朝霞、Ⅰ部）
インド哲学演習（白山、乗入れ〈Ⅰ部⑥、Ⅱ部④〉）
仏教思想論Ⅰ（白山、乗入れ）
仏教梵語講読（白山　乗入れ）
宗教学B（朝霞、Ⅰ部）
〈社会活動〉
財団法人仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会委員／財団法人東方研究会兼任研究員
講演「儀礼と十三仏信仰」（群馬県天台宗布教教学研修会講演、平成十一年八月二十三日、群馬県伊香保町）
〈大学・学部管理・運営活動〉
教養課程代議委員／教職課程運営委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／井上円了記念学術センター研究員（円了研究部門）／東洋学研究所研究所員

伊吹　敦

〈論文〉
「地論宗北道派の心識説について」（単著、「仏教学」第四〇号、平成十一年三月二十日、A5判、一三～五九頁）
「菩提達摩の『楞伽経疏』について（下）」（単著、「東洋学論叢」第二四号〈「東洋大学文学部紀要」第五二集〉、平成十一年三月三十日、A5判、一～三三頁）
「禅思想より見たる『共生』実現の根拠」（単著、『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八～十年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書）、平成十一年三月、A4判、九〇～九六頁）
「初期禅宗における『金剛経』」（単著、阿部慈園編『金剛般若経の思想的研究』春秋社、平成十一年十月二十九日、菊判、三三三～三七八頁）
「慧可と慧智」（単著、「印度学仏教学研究」第四八巻第一号、平成十一年十二月二十日、A5判、一九六～二〇二頁）
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会コンピュータ利用委員会委員／仏教思想学会幹事／早稲田大学東洋哲学会会計監査／日本仏教学

会／財団法人東方学会
学会における研究発表
「慧可と慧咢」（日本印度学仏教学会第五〇回学術大会、平成十一年九月九日、龍谷大学）
〈教育活動〉
学内担当科目
学　部：中国仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）
禅の思想と文化（白山、乗入れ）
仏教漢文講読（白山、乗入れ）
仏教学演習（白山、乗入れ（Ⅰ部④、Ⅱ部②））
インド哲学演習⑤・仏教学演習⑤（白山、Ⅱ部、再履）
学外担当科目
東洋哲学演習Ⅱ（早稲田大学）
〈社会活動〉
財団法人東方研究会兼任研究員
〈大学・学部の管理・運営〉
情報機器運営委員会委員／白山情報機器運用委員会委員／文学部内情報機器関係小委員会委員／文学部内入試小委員会委員／東洋学研究所研究所員

平成十一年度演習ゼミ活動報告

渡辺章悟

インド哲学演習①　朝霞

① テーマ「ウパニシャッドを読む」
② メンバー　赤坂史人（幹事）他、二年生五名、四年生一名
③ 活動報告

本年度はチャーンドーグヤ・ウパニシャッド第二章と第六章のサンスクリット原文を読んだ。初めに担当者がウパニシャッド全体の概説と本ウパニシャッドの構成及び解説を行い、第二章は英訳を補助資料にして、このウパニシャッドの思考方法に慣れることを試みた。特に前期はサンスクリットのCDやカセットテープなどを利用して、実際にウパニシャッドの朗読を聴いてもらい、サンスクリットの雰囲気に親しんでもらうことにした。

ゼミの進め方としては、あらかじめ分担を決めておき、毎回一人のゼミ生にレポートしてもらい、それを全員で批判するという方法を取ろうとしたが、他のゼミ生からの発言はあまり見られなかった。ただ、人数が少ないこともあって、一人が何度も担当することになり、結果的に全員が毎回予習することになった。そのため、かえってよい結果をもたらし、最後には積極的に他の関連する文献まで調査してくる学生も見られた。

恒例となった夏合宿は、本年は豊丘セミナーハウスにて行った。二泊三日で、四年生は卒業論文（制作）の中間発表を行ない、その外のゼミ生にはナーガールジュナの『中論』を読んでもらった。これは仏教思想への誘いという意味ばかりでなく、サンスクリットの語学力向上にも大いに資することができたと思う。

橋本泰元

インド哲学演習②　朝霞

① テーマ「ヒンドゥー教思想入門」

② メンバー　植村高志（幹事）・藤原将明（副幹事）他、二年生十七名、四年生一名

③ 活動報告

昨年度に引き続き、ヒンドゥー教の中心思想であるバクティ（信愛・帰依）思想を、史上初めて明示された『バガヴァッド・ギーター』のなかに見ていくことを課題とした。

はじめに担当教員が、『ギーター』の使用テクスト（ヒンディー語による注釈付きインド流布本）と和訳・参考書などの紹介・解説をした。次いでデーヴァナーガリー文字の習得、サンスクリット語辞典の引き方、文法書の参照の仕方など初等語学の訓練を始め、文法注の解説のある第一章を除き第二章から文法的読解の作業を輪読形式で開始した。担当教員が受講生の積極的で主体的な参加を促したのであるが、本科目が選択科目であることも手伝ってか、この作業に興味を持たない受講生は授業に欠席勝ちになっていき、しだいに輪読の分担者が固定してきた。この輪読は一回の授業で二人の分担者にレポートを用意してもらい、担当教員が講評を加える形で行った。熱心な受講生には語学学修のこつを学んでもらうことが出来たと思う。

このほか、受講生の動機付けを狙って、今年度は、学年当初にインド映画を多くの希望者とともに銀座で鑑賞し、その後インド料理店で会食を行った。また、授業中にヒンディー語版『マハーバーラタ』映画の『ギーター』の場面や、インド文化に関するヴィデオを見てもらい、また『ギーター』の現代風朗誦のテープを聞いてもらった。

インド哲学に興味をもつ多くの受講生の語学能力とインド思想・インド文化に対する関心の程度の実際は千差万別であり、例年ながら一つの演習クラスの授業運営の難しさを感じざるを得なかった。

清水　乞

インド哲学演習　白山（乗り入れ、I部③、II部①）

① テーマ「インド美学と芸術思想」

② メンバー　東海林靖生（幹事）佐藤由紀子（副幹事）他、四年生十二名、三年生十一名、二年生六名、大学院三名

③ 活動報告

今年度は特に二年生の新加入者が多く、例年行なっている導

入のための解説に重点を置いた。このゼミの課題は美的な対象に接した時の人間の美的感動、つまり、人間はなぜ主題の醜美を問わず、芸術作品に反応するのか、という哲学的問題をインド的観点（理論）から検討を加えることにあるから、各自が既に持っている美的体験をインド的観点から検討することがゼミ活動の中心となるべきである。この解説終了後、ビデオによって理論を検証することを試みたが、これは無謀であり、失敗に終った。この失敗を反省し、理論の理解を深めるために、和文と英文各一編の論文を精読し、これを各人がレポートとして、内容の要約を提出、このレポートを中心に全員が討議・討論した。しかし、活発な発言はみられなかった。この点、参加者の反省を促したい。同時に、参加者の準備不足を指摘しておく。

ゼミを運営する形式について反省すべき点が多かった。昨年度（平成十年度）は、芸術分野ごとに班を組織して、グループ発表の形式を採ったが、グループとしての発表というに至らず、個人発表となったため、討論の時間がとれなかったので、全体討議・討論の形式を採ったのであるが、発言者が限定され、傍聴者が目立った。この点は次年度に工夫しなければならない。前期終了時にゼミコンパを行なった。OBとOG各一名の参加を得て、歓談することができた。

菅沼　晃

インド哲学演習　白山（乗り入れ、I部④、II部②）

① テーマ「インド思想の人間観」

② メンバー　助光明良（幹事）木村伊沙子（記録）他、四年生九名、三年生十三名、二年生六名、大学院三名

③ 活動報告

1、このゼミの目的は二つあり、一つはサンスクリットをインドの伝統的な方法で学び直し、サンスクリットによるインドの思考方法を学ぶことであり、第二はサンスクリット文献を用いて、インド古典中に示されている人間観を明らかにすることである。この目的のために、インド人向けのサンスクリット入門書 Saṃskṛta-pāṭhamālā を各班ごとに一章づつ分担し、サンスクリット文の文法的説明、および、その内容についての発表を行なった。(1) A班（ウパニシャッド班）：Guru-kulam について発表。インドの伝統的なバラモンの家庭、学生期の修行生活などについて、資料により研究発表した。(2) B班（叙事詩・法典班）：Kurukṣetram について講読発表。Mahābhārata、Bhagavadgītā について、神話・宗教的な面から発表した。(3) C班（文学班）：Kālidāsaḥ について講読発表。Kālidāsa の作品の特色について発表した。(4) D班（仏教班）：Bhagavān Buddhaḥ について講読発表。仏伝資料・仏滅年代などについて発表した。

2、平成十一年八月六日～八日、夏期合宿研修（インド思想研究会・大学院ゼミと合同）を山中湖セミナーハウスで行なった。

第一日：午後四時～五時　ゼミ四年生の卒論中間発表
午後七時半～九時半　ゼミC班発表
第二日：午前九時～十一時
インド思想研究会とともに Rāmāyaṇa の講読
午後三時～五時半／午後七時半～九時半
大学院生、および大学院OBの研究発表聴講
第三日：午前九時四十分　解散

3、月一回の卒論指導、中間発表を行なったが、今年度は四年生のゼミ出席がよくなく、充分な卒論指導ができなかったことが反省される。

橋本泰元

インド哲学演習　白山（乗り入れ、I部⑤、II部③）

① テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー　市川正樹（幹事）岩谷義彦（副幹事）他、四年生十三名、三年生十六名、二年生四名

③ 活動報告

昨年度に引き続き、十世紀ころに現形が成立されたとする『バーガヴァタ・プラーナ』において完成された民衆的なバクティ思想と、それが北インドにおける中・近世の民衆的なバクティ思想運動のなかでどのように展開していったかを中心課題とした。

初めに、担当教員が新入ゼミ生を中心に、使用テクスト（インド流布本で第十巻「ラーサの五章」）と英訳、和訳、研究書、およびヒンドゥー教関係の事典を中心とした参考文献の紹介・解説を行った。

このテクストの継続輪読は、語学力増進を狙い主に三年生を中心に一回一頁のペースで行った。概してプラーナ聖典の読解は言語的にも難しいので、これまでの反省に鑑み、今年度は担当教員が分担者の予習のためにかなりの量の予備知識を与えておこなった。しかしながら、担当者は例年のように偏らざるを得なかった。

こうした作業に興味を持てない受講生のために、今年度は、昨年度末に和訳・注付けを課題としたヒンドゥー教女神に関する英文研究書の輪読も併せて行った。名著である David Kinsley: *Hindu Goddesses*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1987 をおおよそ一段落ごとに分担させ、本文と原注の和訳および訳注を付けてレポートさせ、授業中に担当教員がこれを講評した。この作業は、インド思想・文化に関する卒論あるいは卒業制作で少なくとも外国語の文献を使用して、邦語資料にばかり頼る安易な卒論あるいは卒業製作を避けて欲しいと考えるからである。この作業は、受講生に案外受け入れられたようであった。

今年度は、卒業論文あるいは卒業制作の自主的な中間発表がなかったのでゼミに相応しい授業が行えなかったため、オフィス・アワーに個別指導を行うことにした。

渡辺章悟

インド哲学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）

① テーマ「般若・中観研究」

② メンバー　上原希望（幹事）他、四年生六名、三年生六名、二年生一名、大学院二名

③ 活動報告

昨年度に続いて『八千頌般若経』第一章を講読した。今年度からの新ゼミ生のために最初に初期大乗仏教、及び「般若経」全体の概説を何回か行ない、つづいてサンスクリットを中心に『八千頌般若経』をゼミ生が分担してレポートしていった。毎年の事であるが、ほとんど担当者と分担者との質疑応答に終始し、他のゼミ生からの積極的な発言がみられなかった。ゼミとしては何らかの方法を新たに導入する必要を感じている。

ゼミ生の人数が少ないこともあり、三年生を中心として何回か発表の機会があったために、原文で考えてゆくための訓練にはなったと思う。

恒例となった夏合宿は、本年度は豊丘セミナーハウスにて行った。二泊三日の中で、四年生は卒業論文（制作）の中間発表を行ない、その外のゼミ生にはナーガールジュナの『中論』を読んでもらった。これは仏教思想への誘いという意味ばかりではなく、サンスクリットの語学力向上に大いに資することができたと思う。

森　章司

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部③、Ⅱ部①）

① テーマ「原始仏教研究」

② メンバー　川島亮平（前期幹事）・瀬川卓也（後期幹事）他、四年生九名、三年生十二名、二年生六名

③ 活動報告

森の原始仏教概説の後、共同研究と個人研究発表を二本の柱として進めた。

共同研究はディベート形式によって進めた。第1回目のテーマは「原始仏教では苦行を否定したか、肯定したか」。第2回目のテーマは「仏教（原始仏教）は優しい宗教か、厳しい宗教か」で、これを「Suttanipāta」の教えにしたがって生きようとすると、われわれには為しえないほどの過重なものを要求されているか、どうか」と読み替えた。

第1回目のディベートは、従来通り学生がレフェリーとなって進めたが、第2回目は森が司会進行役を勤めてみた。これは司会役が自然とディベートの方向を決定づけてしまうような傾向ともなるので、やはり従来通り、学生の中から司会進行役を立て、自由に討論してもらったほうがよいということになった。しかし反面では、司会進行役はある意味では、ディベートをする当事者よりも十分に当該事項に関する知識をもって、ディベートをリードすることも必要であり、これを次回からのレフェリー役に要求することになった。

なお、今後やりたいテーマとして、ディベートにはなじまない「原始仏教における『悪（悪人）』とは何か」という形のテーマも浮上してきているので、来年度はディベートの外に、自由討論形式も採り入れることになった。

個人研究発表は、夏休みの合宿（山中湖セミナーハウス）と後期の冒頭において、四年生は「卒業論文」「卒業制作」の中間報告、三年次生以下は「自由研究」（「卒業論文」「卒業制作」を視野に入れた上での）の発表を行ない、指導した。昨年度の本欄でも報告したように、当ゼミでは「卒業論文」よりも「卒業制作」として、「資料集」を作るよう指導している。このためには原資料をきちんと読み込まざるをえなくなるので、質は下手な「論文」より格段に上がっている。

伊吹　敦

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部④、Ⅱ部②）

① テーマ「禅思想史研究」

② メンバー　林香奈（幹事）他、四年生八名、三年生五名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持つ「禅」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

本年度は、いわゆる「チベットの宗論」の基礎資料である『頓悟大乗正理決』を講読した。禅思想の特質が、インド僧との対論を通して明らかになることを期待したためである。

確かに文献自体は極めて興味深いものであり、その意味では学生諸君の関心を惹くことができたと信ずるが、反面、問題点も多く発生した。その最も根本的な原因は、テキスト自体があまりに難解に過ぎ、学生が充分な理解を得ることができなかったということにある。この文献は、漢文でありながら、異境のチベットで編集されたため、構造・文章とも極めて稚拙であり、これを読みこなすことは、誰にとっても容易なことではない。このような特殊な文献を学部生に課したことについては、やや軽率に過ぎたかと反省している。

ただ、そのような問題があったにも関わらず、熱心に勉強し、立派な資料を作成してきてくれた学生が幾人も見られたことは、私としても非常に心強く、また嬉しかった。しかし、一方で、全く意欲を示さない学生がいたのも事実であり、今後の運営上の課題といえる。

また、ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、授業中での研究成果の発表はなるべくさし控え、研究室での個別指導で対応しようと努めた。授業時間内での卒論指導には余りに制約が多いし、そちらに時間を裂かれてテキストの読解が進まなくなることを恐れたためである。ただ、一部に全く指導を受けようとせず、しかも粗忽な論文を提出したものがいたという現実があり、指導方法の再考をせまられているようにも思われた。

田村晃祐

仏教学演習　白山（乗り入れ、Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）

① テーマ「鎌倉仏教の研究―道元の研究」

② メンバー　関哲之（幹事）・荒川優子（副幹事）他、四年生二名、三年生七名、大学院一名

③ 活動報告

最初に道元の生涯について、入宋前・宋留学中・帰国後の三期に分けて調査報告し、発表してもらった。ついで、漢文を学ぶという趣旨も含めて『普勧坐禅儀』を講読することとし、細分して学生諸君に読解・現代文・書き下し・語釈などを含め、発表してもらい、その内容について質疑応答し、必要に応じて教員がコメントを加えた。次いで『学道用心集』を同様にして註解し、更に『正法眼蔵』の「弁道話」に入ったが、これは未完に終った。

後期は主として卒論の中間発表を行った。四年生が二十二人に上り、更に総合コースの学生や中哲の学生も加わって中間発表を行ったため、多くの時間を費やした。

なお、二年後に定年を控えているため、今年は二年生のゼミ加入者を募集しなかった。

川崎信定

仏教学演習⑥　白山（Ⅰ部・Ⅱ部相互乗り入れ）

① テーマ「唯識思想の基礎的原典の講読研究」『唯識三十頌』

② メンバー　品川妙（幹事）荒田久美子（副幹事）他、四年生十名、三年生七名、二年生一名、大学院一名

③ 活動報告

大乗仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原典の講読を通じて、テキスト批判・文献取り扱いの基本を養成し、今後の卒論研究の基盤を作ることを目的としたゼミナール。今年度は四世紀ごろにヴァスバンドゥ（Vasubandhu 世親）が著わした唯識思想の代表的な論書で、三十の韻文からなる『唯識三十頌』を取り上げた。上級生から下級生までが均等に入るように五班に分けて、毎回各班がサンスクリット原文を担当する輪番制。当番はローマ字テキストとレジュメ翻訳を授業前にコピー配付して、授業中にテーマを決めて思想内容のディスカッションをした。夏の合宿は八月二十五・六日に豊丘セミナーハウスで一泊二日をかけて卒論の執筆内容の経過報告と討議指導を中心に開催。年二回のコンパと花火大会。なにをやるにもまじめでのめり込む人が多く、一緒によく遊び、真剣に考えた充実の一年。

平成十一年度開講科目

〈Ⅰ部〉

朝霞開講科目

インド宗教史　　菅沼　晃

仏教学概論　森　章司
サンスクリット文献講読①・②（サンスクリット語への誘い）　渡邊郁子
インド古典講読（説話劇 Pratimā-nāṭaka を読む）菅沼　晃
ヒンドゥー教概説　橋本泰元
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　蓑輪顕量
インド哲学演習①（ウパニシャッドを読む）　渡辺章悟
インド哲学演習②（ヒンドゥー教思想入門）　橋本泰元
仏教学演習①（良遍著『観心覚夢鈔』を読む）　蓑輪顕量
仏教学演習②（インド伝奇文学「屍鬼二十五話」原典研究）　島田茂樹

白山開講科目

ヒンディー文献講読　宮本久義
アビダルマ哲学（『阿毘達磨倶舎論』講義）　森　章司
卒業論文（制作）

〈Ⅱ部〉

インド宗教史　菅沼　晃
仏教学概論　森　章司
アビダルマ哲学（倶舎論を中心とした部派仏教の思想）　田中教照
サンスクリット文献講読　渡邊郁子
インド古典講読　渡邊郁子
ヒンドゥー教概説　橋本泰元
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　田村晃祐
ヒンディー文献講読　橋本泰元
インド哲学演習⑤／仏教学演習⑤（中国仏教研究）（再履）　伊吹　敦
卒業論文（制作）

〈相互乗入れ科目〉

インド哲学演習（Ⅰ部③、Ⅱ部①）（インド美学と芸術思想）　清水　乞
インド哲学演習（Ⅰ部④、Ⅱ部②）（インド思想の人間観）　菅沼　晃
インド哲学演習（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）（中世ヒンドゥー教思想研究）　橋本泰元
インド哲学演習（Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）（般若・中観研究）　渡辺章悟
仏教学演習（Ⅰ部③、Ⅱ部①）（原始仏教研究）　森　章司
仏教学演習（Ⅰ部④、Ⅱ部②）（禅思想研究）　伊吹　敦
仏教学演習（Ⅰ部⑤、Ⅱ部③）（鎌倉仏教の研究―道元）　田村晃祐
仏教学演習（Ⅰ部⑥、Ⅱ部④）（唯識思想の基礎的原典

の講読研究）　川崎信定
パーリ文献講読　石上和敬
仏教梵語講読（仏教梵語仏典入門）　渡辺章悟
チベット文献講読　川崎信定
仏教漢文講読　伊吹　敦
外国語文献講読　村石恵照
インド文化論Ⅰ（インド細密画を中心に）　島田茂樹
インド文化論Ⅱ　石川　寛
仏教思想論Ⅰ（中観思想概説）　渡辺章悟
仏教思想論Ⅱ　川崎信定
仏教思想論Ⅲ　金子芳夫
インド文学　上村勝彦
インド・仏教図像学（密教図像文献講読）　島田茂樹
インド現代思想　宮本久義
パラモン教哲学　宮本久義
ヨーガとその思想（ヨーガ―その実践を通して）　番場裕之
浄土教の思想と文化　五十嵐明宝
密教の思想と文化　眞柴弘宗
禅の思想と文化　伊吹　敦
法華経の思想と文化　小松邦彫
華厳経の思想と文化　小島岱山
大乗起信論講義　金子芳夫
宗教学概論　川崎信定
比較宗教学　司馬春英

〈大学院〉

博士前期課程

印度哲学特論（パーリ仏教研究）　森　祖道
印度哲学演習Ⅰ（五台山系の華厳思想の日本的展開）　小島岱山
印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（サンスクリット古典文法学（Vyākaraṇa）の研究）　菅沼　晃
仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ（不空羂索神変真言経の梵文写本）　清水　乞
仏教学特論Ⅲ（親鸞『教行信證』の研究）　田村晃祐
仏教学特論Ⅳ（「唯識三十頌」を読む）　横山紘一
仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（インド後期大乗仏教論典原典研究）　川崎信定
仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（智顗『摩訶止観』の研究）　田村晃祐
仏教学演習Ⅳ・仏教学研究指導Ⅰ（「律蔵」の研究）　森　章司

博士後期課程

印度哲学特殊研究Ⅰ（五台山系の華厳思想の日本的展開）　小島岱山
印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（インド哲

学・仏教学の諸問題）　菅沼　晃
印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ（仏像の原像を求めて）　清水　乞
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（仏教と他派との思想交流）　川崎信定
仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ（天台の修行論）　田村晃祐
仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅱ（律蔵資料による釈尊伝の研究）　森　章司

平成十一年度卒業論文

〈Ⅰ部〉

今澤　重典　茅子元の思想についての考察
松阪　亮　「原始仏教における『行』と『道』について—pa-tipadā と magga の用例を通して」
谷村　祐子　インド・アラビアにおける『パンチャタントラ』の比較研究
橋本　郷夫　「新仏教」徒の戦争観
品川　妙　古代インド思想にみる「夢」について— History of Indian Philosophy を手がかりに
入谷　亮　禅宗教団の社会構造における位置
上原　希望　十地経における実践的修行道
岡野　陽子　末那識の働き—安慧釈を中心に
荻野友紀子　マンダラと古代インドの宇宙思想
桑野　麻美　仏教声明の本質を探るための一考察—真言声明を中心に
小山　里奈　バガヴァッドギーターにおける解脱への道
福田　智子　仏教とターミナル・ケア
三留　奈奈　ムガール絵画の中の服飾、装身具
望月香代子　『観無量寿経』における十三の観想について
外川　景子　「サティーの肖像」—The Iconographies of Sati 翻訳
小林　生麻　「禅の四句」を中心とした標語の研究
今野　道隆　諸律薬犍度の比較研究
渡邊　映子　戯曲「チャトゥール・バーニー」の女性描写にみる śṛṅgāra の演出方法
高橋　誠司　『正法眼蔵』における生死観
塩川　和生　「中論」第二十五章の研究
本田真美恵　摩利支天についての一考察
松本健一郎　死体における脳化社会の考察
村越　竜二　『禅茶録』にみる禅思想
池田　陽子　唯識三十頌における識の存在性について
新井　栄子　井上円了の妖怪学の展開
外舘　潤　ヒンドゥー教の宇宙観—現代宇宙論との比較において

岡田　博彰　クリシュナムルティの研究
笹沼志津可　草木成仏思想の日本的展開
赤松　剛志　救済論・アンベードカルの仏教解釈
齋藤　大　然燈仏について
上原　潤　『カーマ・スートラ』における愛と性技
佐藤　伸弦　立川流の思想と本尊
細矢　栄子　良寛の悟境
若松　武樹　インドにおける無償義務教育の発展と課題
平野　重樹　日常生活においての「行」
熊谷　朋子　日蓮と予言
藤田　高志　茶道の宗教性についての考察
今井　明信　道綽における「念佛」思想の特徴
梅原　成真　五部心観—金剛界大曼荼羅　五仏・十六大菩薩の尊容—の写本
小林亜希子　「活仏」について
内藤　純　インドの近代化と性—デーヴァダースィーの変容
二村　宇美　「倶舎論」にみられる経量部思想
中村健太郎　明恵の考えた「菩提心」
小野田瑞穂　チベット絵画「タンカ」におけるチベット人宗教観念
山岸由美恵　インド音楽の旋律と音階を考える
荒木　佑子　日本神話における英雄の比較—スサノオ・オホクニヌシ・ヤマトタケル
佐々木暁史　華厳宗智儼における「無量」の唯識論
江川　準一　ヴィーラシャイヴァ派に見る中世の思想融合とリンガ崇拝の原理
篠原　和彦　『夢中問答』による夢窓疎石理解
大西久美子　Sanatsujātīya の総合研究
星野　陽子　五字文殊像—図像抄をもとに
小林　望　ヴァッラバの救済論における抑制の意図
川島　亮平　二人の改心王

〈II部〉

丸山明日飛　仏教の食の戒律
辻井　義輝　「天台本覚思想」の内容と思想史的意義—『三十四箇事書』に焦点をあてて
佐藤　安弘　心の現象学におけるヴィシュヌ神—その魂の象徴としてのトリックスター像—アヴァターラ思想を中心に主に十化身についての考察
田辺　宏史　般若理趣経（密教に観られる現世利益）
安倍里都香　聖徳太子の仏教思想についての一考察—十七条憲法における思想
日野原　敬　奈良から平安へ時代の過渡期に活躍した空海とその著書『即身成仏義』の研究
竹田　長寿　ジッドゥー・クリシュナムールティの自我観念

深津　杏子　「独り」についての研究
大原　圭子　ヴェーダーンタ哲学における解脱の問題―Śaṅkara の Upadeśasāhasrī を中心にして
佐藤　恵　心身一如の立場を考える―現代の臨床心理学・ヨーガを通じて
早見　雅子　古代インドにおける贖罪の観念
村上　京子　釈尊在世時代における仏教と外教との関わりについて
近藤　悠紀　Upaniṣad における梵我一如の思想について―ātman の思想を中心にして
佐藤幸太郎　夏目漱石文学における仏教語
伊東　達郎　マヌ法典における女性の財産権
鈴木　結子　ターミナル・ケア、ゼハーラについて
開米　和孝　ブリハット・サンヒターにおける気象占い
宋　虎錦　原始仏教における身体観
佐久間弘紀　説一切有部の時間論をもとに時間を考える
稲留　貴之　最澄の山家学生式の研究
斉掛　猛　「剣禅一如」剣術家の心法と禅
佐藤　智恵　ガンダーラ地方及びアフガニスタンの仏教造形美術
関　哲之　ニルヴァーナへの道―東西の交錯する場をめぐって
小林　美幸　手塚治虫に見る科学と人間
荒田久美子　秘密集会タントラを基盤とした人間存在
千田　善久　日蓮の本尊観
塩沢　佳世　『復興亜細亜の諸問題』に於ける大川周明の精神革命
田中　洋平　有時の時間論
林　亜都美　『不動智神妙録』を通して―沢庵のとらえた心
星野　智光　転法輪経の比較対照研究
田中太一郎　ヒンドゥー教におけるガンガーの意義
町田　敦志　仏教経典と「四」についての一考察
根岸賀寿代　無仏像時代の仏陀観について
板垣　正寿　美、あるいは光と影が知らしめるもの
二見　康文　インドにおける「ストゥーパ」思想とその周辺
池澤　雅江　『シャット・チャクラ・ニルーパナ』にみるタントリズムの身体論―チャクラとクンダリニー・ヨーガの考察

大学院修士論文

南川　弘樹　存覚の伝道思想・和語著作からの一考察
富田　雅史　『法苑珠林感応録』の研究―民衆仏教研究資料として
鈴木　健一　Āryamañjuśrīnāmasaṅgīti 研究
高木　信明　『中辺分別論』相品の研究　虚妄分別と空性の

関係について

出野　尚紀　Mañjuśrībhāṣita-Citrakarmaśāstra における図像学的研究

越後　克実　Viṣṇu Purāṇa におけるヴィシュヌ

高橋むつき　『正法眼蔵』における道得の研究

横山いずみ　日本における『薬師経』思想の受容に関する一考察

西　弘司　真宗系新宗教教団の比較教学的研究—異安心論を視点として

東洋学論叢
（東洋大学文学部紀要 第53集）
印度哲学科篇
平成十二年三月三十日 印刷
平成十二年三月三十日 発行 〔非売品〕
発行所 東洋大学文学部
東京都文京区白山五丁目二八番二〇号
電話 印度哲学科（三九四三）三三七
印刷 日新印刷株式会社
東京都文京区大塚五―二十五―十七
電話 〇三―三九四三―一四一一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University

NO. 53

March, 2000

Series of
INDIAN PHILOSOPHY
XXV

CONTENTS

Atsushi IBUKI : Aspects of Social Reaction Caused by the Appearance of Chan in the Capital ····· (1)

Taigen HASHIMOTO : Bhaktism in the Medieval Northern India and Saint-Poetess Mīrāṁ-bāī ····· (81)

Tadashi SHIMIZU : Rāgadhyānas Described in the *Saṅgītanārāyaṇa* ····· (137)

Akira SUGANUMA : A Japanese Translation and Notes of the *Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa* (VI)
—The Meanings and Usages of the Fourth Case (*caturthī vibhaktiḥ*) ····· (170)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo